

## AL ネットワーク運営指導委員会

氏 名	所 属
加藤 久雄	奈良教育大学 学長
赤沢 早人	奈良教育大学 教授
赤間 亜希	日本エコツーリズム協会 研究員
佐藤 恭仁彦	JICA 関西 所長

### (1) 運営指導委員から

#### <加藤学長>

本日の発表を聞いて、高校生がここまで考えているのかと驚かされた。高校生の発言の中に「自分たちが前に立って、他の人たちを引っ張るような存在にならなければいけない」という発言があったが、それこそがこの事業に取り組んだ最高の結果ではないかと思う。

高校生たちは自分たちがやりたいことができる大学を選び進学していく。日本の大学では、これほどグローバルな課題に取り組む体制ができているだろうかという点が自分としての反省点である。

#### <赤沢教授>

国際高等学校では、在籍する生徒の資質や能力をしっかりと見極めて、様々な活動に取り組んでいる。6つの育成する力のルーブリックを開発し、それを生徒に示すことで、生徒には自分の位置や目標が明確である。今後、6つの力がどのように関わり合うのか示す必要があるように思う。6つの力は単独ではなく、融合して総合力となる。この6つの力をどう関係づけるのかが重要である。

生徒が自発的に行動しようとするのは、国際高等学校のこれまでの取組の成果の表れであると思うが、(国際高等学校の活動で)6つの力のどのような力が高まってきたのか検証する必要がある。6つの力の解釈を生徒の具体的な行動に落とし込み、評価していく必要がある。河合塾による評価を導入しているようであるが、出た評価を漠然とみるのではなく、「生徒は〇〇な力がついたのではないか…」というように、結果を見る前に教員が仮説を立てて評価を見る方がよい。

#### <赤間研究員>

私は日本エコツーリズム協会に所属し、観光業に近い立場にいる。これまでスペイン語圏で活動してきた。本日の発表を聞いて高校生の取組はとても真面目だと感じた。また、観光の分野に興味関心を持っている高校生が少なからずいることもわかった。国際高等学校で行われている「世界の言語」の取組は大変興味深い。多くの言語に接し、その中で自分の興味関心がある言語を学び、その言語が話される地域や文化にも興味を持つことになると思われる。

私が滞在していたガラパゴスでは、学生たちは「観光」を学ぶ際に「環境保全」や「経済学」、「経営学」なども学んでいた。「観光」とはその地域の環境を守ることで、そこから生まれてくる利益を得る活動である。ただ単に「観光」を考えるのではなく、「経済学」や「経営学」を学ぶことで、「観光」を取り巻く仕組みや、

「観光」に関する課題解決の一つのツールとして活用できるのではないか。

<佐藤所長>

国際高等学校をはじめ、法隆寺国際高等学校、畝傍高等学校、奈良高等学校は JICA 職員が訪問している学校であり、一応援団のような気持ちで今日の発表会に参加させていただいた。年度当初の連絡の遅れから、各校で探究の取組が始まっており、WWL 連携校のすべての発表内容が「世界的な課題」に関連したものではなかったが、それはそれで、多種多様な発表が聞けて大変よかったと思う。個人の興味を深く掘り下げる発表もあり、大変面白いと感じたし、高校生が SDGs 等の大きなテーマを掲げて探究活動することも興味深かった。

英語でプレゼンテーションしている学校もいくつかあった。英語で説得力のある説明をするのは難しいが、いい試みだと思う。英語教育についてのプレゼンテーションもあったが、小学校の頃は「英語の授業が楽しい」と思う児童が多いが、中学校、高校と上がっているにつれて「英語の授業が楽しくない」という反応になることは、大人も考えなければいけない。

国際高等学校の「世界の言語」で 5 カ国語をすべて学ぶという取組は健全な発想である。私も若い頃は、「なんとなくドイツ語」と考え、第二外国語を学び始めた。「世界の言語」で学習している 5 言語の学校や地域と交流を計画しているようだが、交流先に東南アジアの国々を入れてはどうか。東南アジアの国々は私たちの隣人であり、文化的にも近い存在である。フィリピンなどの英語圏の国々もあるので考えていただきたい。

<祐岡カリキュラムアドバイザー>

国際高等学校に一年間勤務し、たくさんの先生方から相談を受けた。「探究」という分野の学習は教員は誰も学んできていない。しかし、文部科学省は指導するように求めている。「探究」には答えがない。だから生徒は試行錯誤しながら取り組んでいる。教員も試行錯誤しなければいけない。私の国際高校での勤務は「相談にのる」というより、「悩みを聞いている」という感じである。

リモートでの発表会終了直後、国際高等学校の生徒は生徒だけで反省会を行っていた。「もっとこうすればよかった」とか「こんなことができたはずだ」などの言葉が聞かれたが、これこそが学びの姿ではないかと感じた。

WWL は新しい試みである。今年度は発表する学校が増え活発になってきた。残念なことは運営として参加する生徒に偏りがある。事業協力校からの協力の幅を広げる必要がある。生徒は積極的に様々な活動に参加したいという気持ちを持っている。その生徒の気持ちをきっかけに、教員の活動へと広げていき、大人を巻き込んで事業を推進していく必要がある。WWL に取り組むには、拠点校の組織体制の整備は必要であるが、事業連携校においても校内組織を考える必要がある。